

第2章、イギリス経済の世界支配

1, アジア文明品の模倣・茶

イギリス経済発展の原動力は、綿織物、砂糖、茶、陶器等、主としてアジアで生産されている高級製品を輸入して、それを国産化することであった。強くなる国は、優れた他国の技術を躊躇なく取り入れる。イギリスはその典型だった。

キリスト教文化はヨーロッパで8～9世紀に生まれた。しかし、数百年の間、世界に対する影響力はほとんどなかった。一方、アジアでは、18世紀まで唐、宋、明などの中国の文化がキリスト教圏のそれより、圧倒的に優れていた。

インドでは、17世紀に、綿布を製造する専門のカーストが、低価格品や中級品だけではなく、洗練を極めた高級品を生産し、それらはイギリスの水準をはるかに抜いていた。儒教文化やカースト制に支えられた生産活動は、キリスト教やギルド制を基礎としたヨーロッパより高品質な製品を生産していた。

17世紀の中頃以降、イギリスでは、毛織物産業が発展し始め、政治システムが議会制に変わって、国家が総力を挙げて外国と戦える制度が整い、貿易活動は最先進国のオランダに近づいた。所得の上昇にともなって、国民の生活は高級化し、アジアからの輸入品を生活に使う程になった。

代表的な例は、まず茶である。茶を飲む習慣は、17世紀の前半に、日本と中国からオランダに伝えられ、さらにイギリスに伝搬した。当初、茶は薬品として使われた。やがて、輸入品の陶器、磁器、漆器が置かれた部屋のテーブルで茶を飲む習慣が、王族や貴夫人のステイタス・シンボルとして、アムステルダムからロンドンへと広がった。

始めは緑茶がそのまま飲まれたが、間もなく砂糖が入れられ、18世紀になると緑茶より紅茶が好まれた。

エチオピアで飲まれていたコーヒーは、17世紀にトルコを通じてヨーロッパに入ってきた。ロンドンでは数千軒のコーヒーハウスが現れ、そこは上流階級の社交場であり、コーヒーや紅茶をたしなみながら、多様な情報が交換された。紅茶は次第に大衆化し、下層階級も安い紅茶を飲むようになった。しかし、紅茶を飲む意味が上流階級と下層階級では異なっていた。

当時のイギリスでは、労働者は早朝から深夜まで低賃金で働かされた。農業社会の生活に慣れた人が、四季を通じて定刻に出勤するのは辛いことだった。また、職人は、金曜日に夜遅くまで飲み、月曜日は働かないという習慣だった。

労働者は生活を守るため、月曜日でも定刻に出勤しなければならない。早朝にたっぷり砂糖を入れた紅茶を飲むと、紅茶のカフェインに刺戟されてすぐ働ける状態になり、砂糖によって重労働に耐えるだけのエネルギーが供給される。家族は人数が多いから、ゆっくり食事する時間的・経済的余裕がない。彼らは、紅茶を飲み、パンをかじりながら出勤し、

午後の休憩の時も紅茶を飲み、その刺戟と僅かな栄養によって働いた。茶と砂糖は、工業を担う労働者の必需品にもなった。

2, 綿織物の模倣から収奪へ

次の変化はインド製綿織物に対する需要の増加である。インドはイギリスにとってアジア進出の拠点であり、17世紀に生まれた東インド会社は、インド産の綿織物を本国に送っていた。この綿織物はイギリスが苦心して開発した軽い「新毛織物」よりさらに軽く、染色が容易であって色々な色彩や模様 of 生地仕上げるのが可能であった。その上、更紗は蟬の羽根のように繊細で美しく、かつ価格が安かった。

イギリス・フランス・オランダでは、新製品の「インド・キャラコ」のブームが発生した。イギリスの大西洋向け輸出の大半は、インド製綿織物の再輸出品だった。

イギリスの主要産業である毛織物業は大打撃を受け、イギリス経済は危機に追い込まれた。政府は1700年にキャラコ輸入禁止令を、その20年後にはキャラコ使用禁止令を発令して、国内産業を保護し、典型的な重商政策を実施した。

イギリスにおける繊維企業の最大の目標は、インド並みの品質を持つ綿織物の生産にあり、それに成功すれば、国内市場だけではなく、毛織物の主要な輸出市場であった大西洋圏を取り戻し、さらに、インド洋・太平洋圏の膨大な市場を獲得できる。高品質の綿織物は、高品質の細い綿糸から造られるが、イギリスでは太い綿糸しか生産できなかった。高級な紡績機械の開発競争が始まった。

1760年頃から、紡績機の革命が始まり、ジェニー紡績機、水力紡績機、ミュール紡績機と進歩し、インド製に劣らない高品質の綿糸が大量生産された。織布では80年代に、カートライトの力織機が開発された。同じ頃、ワットが蒸気機関を発明し、それがミュール紡績機や力織機に据え付けられて、生産規模は拡大し、コストは低下した。

イギリス北東部のランカシャー地方は、世界の綿業王国になり、その後の産業革命をリードした。イギリス資本主義は、良質の綿布について、インドを含む世界各国に輸出し、カースト制度の下に成り立っていたインドの紡績業者に壊滅的打撃を与えた。

イギリスで産業革命を起こした革新的な機械製品は、いずれも現場の職人が経験と知恵を生かして開発した。イギリスは、国内における自由な経済活動と、厳しい輸入制限の組み合わせという政策によって、伝統的に形成されたアジアの産業を抜き去った。

3, 奴隷の利用

砂糖、茶、木綿の原料はいずれも海外で生産されていた。イギリスは、それを入手するために世界的スケールのサプライチェーンを創り上げ、キリスト教文化が世界を支配する時代を創った。砂糖と木綿は類似したサプライチェーンだった。

オランダは、17世紀にカリブ海の植民地で奴隷を使ったサトウキビのプランテーションに成功した。イギリスはそれをまねて、ジャマイカ島でプランテーションを開始し、間もなく、イギリスの植民地は世界一の砂糖生産地になった。

プランテーションには、高額な資本投資と、熱帯下の過酷な労働が必要である。連作を続けると、土地生産性の低下を防ぐため、土地改良やプランテーションの移転が繰り返されるから、膨大な数の奴隷が必要であった。

奴隷は、西アフリカで火器、安価な綿布、タバコ等と交換され、1人約5ポンドで数百人を仕入れ、奴隷船に詰め込んで、ジャマイカ島などへ送り、1人約13ポンドで売却した。イギリスが運んだ奴隷は総計で300万人という（「世界の歴史25」・加藤祐三、川北稔）。アフリカから新大陸に送られた奴隷数は900万人から1100万人と推定されている。帰りの船には、現地で大量の木材を使って粗製された砂糖を満載して母港に戻り、そこで砂糖が精製された。

綿糸は18世紀の終わり頃から、品質競争が激しくなった。17世紀には、紡績業者は、インドにおけるイギリスの綿花プランテーションや現地の兼業農家から短繊維の綿花を仕入れたが、技術進歩とともに、高級な細い糸を生産するには長繊維の綿花が必要であることが判り、それは、主としてアメリカ合衆国で生産されていた。（川勝平太「日本文明と近代西洋」・NHKブック）

綿花の中心は、徐々にインド綿からアメリカ綿に移り、イギリスは西アフリカで安い綿織物と奴隷を交換して奴隷をアメリカに運び、帰りには綿花を満載してリバプールに入港した。

奴隷のような身分の白人も少なくなかった。イギリスで食い詰めた人や犯罪人は、アメリカに送られ、移動の自由がない労働者として、プランテーションで働かされた。海外のプランテーションは、資本主義体制から落ちこぼれた白人の廃棄場所でもあった。

ロバート・W・フォーゲル（1993年ノーベル経済学賞受賞）は、奴隷制は効率的な生産形態であるという論文を発表した。典型的な奴隷は、能力があり、平均的な白人労働者よりよく働き、能率も良かった。その理由は、物質的な生活状態が、自由身分の産業労働者より恵まれていたからだという。

奴隷所有者は、奴隷が生産性に勝っているのだから、いつも健康を気遣っている。それはロバの所有者がロバの健康を心配するのと同じである。奴隷は、16歳まで親と同居し、その後は市場で売られる。フォーゲルは、独立心が必要になる年令で親と別れるから精神的にも強いという。

南北戦争以前の農業では、南部が北部より35%も生産性が高かった。フォーゲルの真の主張は、奴隷もその子孫も白人には決して劣っていないということだった。

奴隷制はイギリス国内では1772年、イギリス帝国全体では1833年、アメリカでは1860年代の南北戦争後に、それぞれ廃止になった。それは、ヨーロッパでは、甜菜糖の利用が広がり、カリブ海周辺地域の砂糖の需要は低下し始めたからだ。奴隷の多くは次

第に日雇い労働者に変わり、鉄道建設のように、膨大な数の労働者が必要な時には、中国人などアジア人の出稼ぎ労働者によってまかなわれた。

キリスト教徒は、新大陸やアフリカで沢山の文化を潰した。スペインはアステカやインカやマヤ等、優れた文化を根こそぎ破壊した。アフリカの西海岸では、膨大な中堅労働力が奴隷として売られ、固有の文化が消えた。中南米の先住民やアフリカ人の奴隷は18世紀始めまで、一種の動物として扱われたので、肉体に染み込んだ歌と踊り以外の文化を継承できなかった。

カトリック教を海外に布教するイエズス会やフランシスコ会などの聖職者は、文化的アイデンティティーを失い、精神的に苦しんでいる中南米の原住民の心の隙を埋めた。堂々たる教会がつくられ、そこには、現地人の顔をしたキリストやマリアが祀られ、現地人はキリスト教の信者になった。アメリカの黒人奴隷も、キリスト教に支えられて生き、現在では、日曜日に、黒人が大部分を占める教会で、美しい和音のゴスペルを歌っている。キリスト教徒が行った悪事を、キリスト教が救ったといえよう。

アフリカ大陸の地中海側では、イスラム教徒がキリスト教の侵入を防いだ。キリスト教とイスラム教の戦いは、現在まで続いている。

4. 茶とアヘンと砲艦外交

ヨーロッパは、茶をインドと中国から輸入した。18世紀の中国は豊かであり、品質が悪いヨーロッパの工業製品には需要がなかったため、輸入代金は銀で支払われた。イギリスでは茶の需要が増加の一途を辿り、総輸入額の30%を占め、膨大な銀が中国に流出し、対中貿易赤字は耐えがたい大きさになった。

イギリスは、インドの農家にアヘンを栽培させて、東インド会社がそれを独占的に買い上げ、中国に輸出することによって貿易赤字を埋めた。その輸出量は急増して、(角山栄「茶の世界史」氏中公新書)によると、1760年代には1000箱だったが、1840年代には5万箱に増えて、中国のアヘン中毒者が河南から華中へ蔓延し、銀が流出して、中国の銀価格が暴騰した。

中国政府は、アヘンの輸入を厳しく取り締まったが、イギリスとのアヘン戦争に敗れ、1842年に屈辱的な南京条約を締結した。この条約によって、5つの指定港でアヘンを始めとする全ての商品の貿易を自由化させられた上、香港が割譲され、賠償金2100万ドルを支払わされた。1880年のアヘン輸入量は10万箱に達した。イギリスは、アヘン輸出によって膨大な利益をあげて、銀を蓄積しつつ茶を輸入できた。

イギリスは、19世紀の初めに、インドのアッサム地方で茶のプランテーションを開始し、それをダーズリン、セイロン島に拡大し、茶は英連邦内で自給可能になった。

5, 経済の成熟・産業から金融の国家へ

イギリスは、1850年には、第二次産業に従事する人口のウエイトは40%を越え、中心は繊維産業から、鉄鋼業、石炭業、機械産業に移り、銑鉄や石炭の生産では、イギリスに次ぐ工業国・フランスのそれぞれ4倍、10倍に達した。農業は20%近くに低下した。

リカードは、19世紀の初めに、イギリスの工業製品とヨーロッパ大陸の農産物との自由貿易を主張し、穀物法の撤廃を要求した。彼は、「A国とB国がそれぞれ2つの財を生産するより、個々の国が得意とするどちらか一方の財の生産に特化し、貿易によって補完し合う方が両国にとって有利である」という比較生産費説を唱え、国際分業と外国貿易が世界経済の発展になると考えた。

しかし、イギリスは、世界最強の経済国になっても、貿易制限を続けた。大陸から穀物輸入を禁止した穀物法は1846年まで、イギリスの港から外国船を排除した航海法は1849年まで、それぞれ廃止されなかった。

イギリスでは、海外奴隷貿易、砂糖や茶のプランテーション、アヘン取引、国内における綿工業や重化学工業の発展によって膨大な量の金と銀が蓄積され、通貨のポンドは信頼性が高まり、国際通貨になった。イギリスは、自由貿易を強く主張するようになり、またポンド建ての海外投融資を拡大した。

イギリスは、ヨーロッパの強国やアメリカに対して、資本財を輸出し、長短期融資を実施した。革新技術の商品化には、技術的・経済的に恵まれ、かつ長い開発期間が許されるという条件が必要であるが、模倣生産は、低コスト、短時間で可能である。

ヨーロッパの主要国やアメリカも、自由に行動しなかった。重化学工業の発達程度が軍事力の強弱を決るから、リカード学説に反し、国家が支援して国産化を急いだ。1860年代には、早くも、フランス、ドイツ、ベルギー、ロシア、南北戦後のアメリカで産業革命が完成し、5カ国の製造業の生産高を合計すると、イギリスをはるかに抜き、1875年頃には、アメリカが世界の工業国になった。イギリスは工業製品の輸出は減り、貿易収支は赤字に転落した。

しかし、イギリスの世界最強の軍隊は、優れた艦船と航海術によって支えられ、世界中どこでも、必要な箇所に短期間で大兵力を送ることができた。当然ながら、商船の輸送能力が優れ、また世界の重要拠点における港湾設備を利用できたので、膨大な海運収入を獲得した。

イギリスは、世界に巨大な植民地を持っていた。インドはパキスタンやバングラデシュを含んでおり、その隣のビルマも植民地だった。南アフリカやエジプトも重要な植民地だった。ロンドンの銀行家は、世界各地の政府や、植民地における鉱山開発、プランテーションに資金を投入し、巨額な利子や配当を稼いだ。

貿易収支の赤字は、利子・配当やサービス収入の黒字で埋められ、経常収支は黒字になった。イギリスは、1970年頃から、金融で暮らす「有閑国家」になった。

なお、イギリスでは人口が増加し、19世紀の100年間で3.5倍になった。リカードは17人兄弟だった。ジェントルマン層では長子相続制のため、次男以下が生活に困っていたが、植民地に上等な雇用を発見し、解決された。

例えば、イギリスがインドを直接統治すると、現地の省庁の社会的評価が高まり、インド勤務はジェントルマン層に相応しい名誉ある職に変わり、オックスフォードや、ケンブリッジ出身者の才能ある若者が殺到した。ケインズも2年間勤務した。

イギリスは、1870年頃から、次第に製造業大国の地位を失い、経済衰退期に入ったが、金融力と軍事力によって、その後約45年間も、覇権国の地位を守った。